北海道医歌人会詠草

水温む

函館　水関　清

やはらかに　光纏へる寒卵　拾へば親の温み宿せり
勤務終へエレベーターの中で食む　キャラメルひと粒　さあタ支度
優勝の校歌聴き入る顔と顔　汗も涙も　金足農高
真似できぬ技と　見本になる技と　高木姉妹の平昌の冬
茄子カボチャ揚げし天婦羅　さっくりと　得意のシェフは御年九歳

郷愁

旭川　稲積　文子

故郷を離れて四十年過ぎたりと　先輩啄木の歌口ずさむ
ほろ酔いて啄木の歌を口ずさむ　調子はずれてやるせなは増す
研究を一筋として生きて来て　今故郷をなつかしむ人
加齢をば華麗と書いてうなづけど　何処からともなく悲しみが湧く
高齢の社会となりて療養の短歌は　消えて老々短歌

ナナカマド

江別　三宅　浩次

真白な歩道の雪にレンジャクが去った後にナナカマドの実
緩やかな坂道に添うナナカマド夕焼け空にどこまで続く
落日にナナカマドの実の色映えて落葉の枝に残る青空
北国の街路樹としてナナカマドは四季それぞれの姿を映す
真っ直ぐな形が好きだと言った父天から今を見守っている

シャコバサボテン

札幌　浜島　泉

鉢植えのシャコバサボテン花咲きぬ　写真に撮りて娘へメール
ポプラの木散りつくすとき来る根雪　溶け濡るる道葉の揺るぐ見ん
回診時語るはなくも手を挙げて握手求めつ　鳶なりし人
ナナカマド一昼夜にて実が失せり　鳥ども飢餓をしかと越えなむ
コンビニに入りフード剥ぐ　立春のいと寒き朝出勤の途(みち)

凍夜

釧路　児玉　昌彦

また一人　同世代から訃の報せ笑顔写真の葬儀空しく
患者にも職員・友にも愛されし老内科医の抱えし死病
ふるさとの清流溯(のぼ)る鮭のごと卒然と逝けり　役終えし後
「新世界交響曲」で葬(おく)送る朝　窓の結露がハラリと落ちぬ
轟々と地吹雪荒れる夜は更けて白一色の夢降り積もる

厳冬

北広島　古屋雅三知

ギュッギュッと　人の歩みし音聞こゆ　まだ明けきらぬ冬の朝かな
雪降りて　踏み行く道の足下(もと)の音の高さで厳寒を知る
晴れ渡る青空の下　凍てつきし白き花咲く樹氷は立てり
人気無き小さき町の駅前に光り輝くイルミネーション
凍てつきて澄みし空気に　浮かび上がるボールパークの彩(あざ)やかな文字